



お問い合わせ先
大里農林振興センター 農業支援部
 熊谷市久保島1373-1
 TEL. 048-526-2210 FAX. 048-526-2494

夏期におけるねぎの栽培管理

1 ねぎの生育を振り返って

令和5年、熊谷の平均気温は6月～9月にかけて平年と比べかなり高く、最高気温が30℃以上となった日数が過去最高を記録するなど記録的な暑さとなりました。

生育については、夏の高温や乾燥によってシロイチモジヨトウ等の害虫が多発生し、大きく抑制されました。また、高温や急な大雨の影響により、白絹病、軟腐病等の病害が多発生し、生育が極端に不揃いな状況となりました。

夏期は気温が上昇し、厳しい暑さが続いたり、集中豪雨が発生したりと気象の急激な変化による病害虫の発生が問題となる時期です。今後も極端な気象条件が予想されるため、土づくりや予防中心の体系防除、気象に応じた管理等の基本的な対策を行います。



2 害虫対策

① シロイチモジヨトウ (図1)

- ・葉でふ化した幼虫は集団で葉身内に食入し、中から表皮を残して葉肉を食害する。
- ・しばらくは集団で生息するが、次第に分散して食害する。

- ・老齢幼虫は薬剤の効果は低下するため、若齢幼虫のうちに防除する。
- ・同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達しやすくなるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

② ネギネクロバネキノコバエ (図2)

- ・幼虫が地中で茎盤部や軟白部を食害する。激発するとほ場が平枯れる。
- ・3月中旬～12月上旬まで長く活動し、特に9月～10月に増加する。11月が成虫の発生ピークとなる。

- ・発生初期の防除が重要であり、8月末の株元かん注から、約3週間に1度のローテーション防除を行う。

3 病害防除

① 白絹病 (図3)

- ・株元の地際部付近に白色で絹糸状の菌糸、淡褐色球形の菌核を生じる。

- ・梅雨末期から8月下旬にかけて最も進行する。乾燥状態の後に過湿状態が続くと激増する。
- ・地際部や周辺の地表面に白色の菌糸が生じたら直ちに株元散布を行う。

② 軟腐病 (図4)

- ・一般に葉鞘軟白部や根が部分的に淡褐色になって腐敗し、強い悪臭を放ち、やがて地際部から倒伏する。
- ・梅雨入り後から気温の上昇に伴って被害が進行する。
- ・窒素肥料を多用すると、生育が軟弱となり発病を助長する。
- ・高温期に根を痛めると発生を助長するため、高温期の土寄せは避ける。
- ・排水対策を行い、地際部を重点に薬剤散布する。

(大里農林振興センター 農業支援部)

農業支援部



図1 シロイチモジヨトウの食害



図2 ネギネクロバネキノコバエの食害



図3 地際部に生じた白絹病



図4 軟腐病による倒伏

